

【巻頭文】

「コンラッド没後 50 年」を振り返る

— 『英語研究』(1974 年)の特集記事を読んで—

設楽 靖子

はじめに

2024 年はコンラッド没後 100 年にあたり、イギリス、アメリカ、ポーランドなどで記念の国際会議が予定されており、日本国内でも、おそらく、そのように銘打った行事がいくつか計画されているであろう。

日本国内では、1924 年 8 月のコンラッド逝去後まもなく、『英語青年』(研究社)が同年 11 月号を「コンラッド記念號」と銘打って 10 数点の関連エッセイを載せた。1922 年にコンラッド宅を訪問していた日高只一(早稲田大学教授)が中心で企画されたようである。

それから 50 年後、同じく研究社の別の月刊誌『英語研究』は、1974 年 11 月号にて、「コンラッド没後 50 年記念」の特集を組んだ。稿末の図版 1、2 は、その号の表紙と目次の一部である。この月刊誌は副題に「文学・語学・文化情報」と付いており、『英語青年』に比べると、文化情報誌的な役割を持っていたのかもしれない。1975 年に廃刊になったため現在は目にする機会がないが、国内大学図書館 200 ヶ所以上に所蔵があり、当時はこの月刊誌を目にした人も多かったと想像される。¹この特集号は、日本国内での 1974 年時点のコンラッド研究動向を概観するうえで有効な資料になり得るのではないか。今年の没後 100 年からちょうど折り返しにあたる時点を振り返るものとして読んでみたい。

そもそも「没後 50 年」とは、数字のキリが良い以外に何か意味があるだろうか?その問いに対して、1 つ明解な答がある。*The Cambridge Companion to Joseph Conrad*, ed. J. H. Stape (1996)において、1960 年代～1970 年代の研究動向を振り返る文章の中、編者 J. H. Stape は、“Conferences held in Texas,

Miami, Canterbury, and San Diego to observe the fiftieth anniversary of Conrad's death marked a watershed in Conrad studies, confirming Conrad's status as a writer of world stature diversely investigated by a far-flung community of scholars" (249) と位置づけている。ここでいう“watershed” (転換点)とは、この *Cambridge Companion* が刊行された 1996 年時点から振り返って、具体的にどのような現象を指したか。そして、その時期の欧米での研究動向は、日本の 1974 年の動向とどのように連携していた (あるいは、していなかった) のであろうか。このエッセイは、その 2 点を探ることを目的とする。

I. 1974 年は、どのような watershed をなすか

まず、上記引用文にある 1974 年の“conferences”に注目する。この中、Canterbury で開催された学会はケント大学を会場とするもので、これがどのように画期的かつ充実した国際会議であったかは、2 年後に成果としてまとめられた論集 *Joseph Conrad: A Commemoration—Papers from the 1974 International Conference on Conrad*, ed. Norman Sherry (Macmillan, 1976) から知ることができる。編者 Norman Sherry による Introduction を見ると、この記念大会に向けて、1971 年にロンドンでの会議にて提案され、1972 年にはポーランドで準備会議 (international colloquy) が催されるなど、周到に準備されていたことが記されている。結果、この *A Commemoration* は 17 名の寄稿からなり、Alfred J. Guerard, Tonny Tanner, Ian Watt, Eloise Knapp Hay, Edward Said, Zdzisław Najder, Frederick Karl, Thomas Moser, Ugo Mursia, Adam Gillon ら、1974 年時点でのイギリス、アメリカ、ポーランドなどでの第一線の研究者を含み、かつ、これ以降にコンラッド研究を牽引していく (必携研究書を執筆する) 顔ぶれが揃っていることが窺える。たとえば、Ian Watt, *Conrad in the Nineteenth Century* (1979), Z. Najder, *Conrad: A Chronicle* (1983) などは、この国際会議の数年後に出版されることになる。

1. 当時のコンラッド研究の基本ツール

原著テキストは、研究用には Dent 版(1946-55)が標準として使われていたが、textual studies を経た決定版として Cambridge Edition シリーズが刊行され始まるのは 1990 年である。

書簡集は、1974 年時点では、G. Jean-Aubry, ed., *Joseph Conrad: Life and Letters* (1927), *Joseph Conrad: Letters to William Blackwood and David S. Middleton* (1958), *Conrad's Polish Background*, ed. Z. Najder (1964), *Joseph Conrad's Letters to R. B. Cunninghame Graham*, ed. C. W. Watts (1969)のみであった。網羅的書簡集として *Collected Letters* が Cambridge University Press から刊行開始されるのは 1983 年である (2007 年に完結)。

評伝は、定番として Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography* (1960)があり、Norman Sherry, *Conrad in the Eastern World* (1966)などがそれを補填するものとして有用であったが、Z. Najder, *Joseph Conrad: A Chronicle* (1983) は、まだ英語版で刊行されていなかった。

専門の学術誌として、アメリカの *Conradiana* 誌は 1968 年に創刊されていたが、英国コンラッド協会による *The Conradian* の創刊は 1981 年である。

2. 社会的背景、あるいは批評の潮流

1974 年時点で研究の基本ツールが現在ほど充実していなかったことは当然であるが、それと同時に、1970 年代後半から英文学研究を取り巻く諸相・環境が変わり始める、その前か後かという違いも重要である。

コンラッド研究においては *Heart of Darkness* をめぐる事情がわかりやすい。チヌア・アチェベによる“An Image of Africa”が *Massachusetts Review* に掲載されたのは 1977 年であり、以降の *Heart of Darkness* 論には欠かせぬ 1 点として作品の読み直しを促し、1980 年代以降の postcolonial perspective の先駆けの 1 つとなった。加えて、F. コッポラ監督 *Apocalypse Now* は、コンラッド学界の外でも作家名が広く言及されるきっかけとなったが、それは 1979 年であった。

また、1974 年の国際会議に参加していた E. サイドが *Orientalism* を刊行するのは 1978 年。日本では早々に西アジア研究者が注目して 1979 年に日本語訳が出たが、この 1 冊が提示した「他者イメージ」に関わる問題提起、およびこれに続く批評家サイドの刊行物が英文学の分野で言及され始めるのは 1980 年代後半である。

S. ラシュディがブッカー賞を受賞し、「周辺からセンターへ書き返す」といった概念が提示されたのは 1981 年であり、postcolonial という用語・

概念が *The Empire Writes Back* (1989)などを機に普及し始めるのも、同時期である。

つまり、1974年は、こうした変化（さざ波ないし大波）の影響が及ぶ以前であった。中井亜佐子著『日常の読書—ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』を読む』（2023）の中、著者は自身の英文学事始めを振り返って、「1980年代後半から90年代前半」は「英文学研究や批評の潮流が大きく方向転換した時期」（268）であったと述べている。1974年は、この「方向転換」の前夜にあたる。

3. 国内での研究環境

ここで、日本国内の事情をみておく。明治以来のコンラッド受容の流れを辿る意図ではなく、あくまで1974年に焦点を絞る。

概説書として今でも重宝な中野好夫編『20世紀英米文学案内 3 コンラッド』（研究社 1966）は、1974年当時、入門用として、かつ踏み込んだ内容を含むレフェレンスとして、幅広く使われていたであろう（後述）。

また、大学での英語 reading 教材として、原文に詳細な注釈をつけた注釈書が、研究社（小英文叢書）、北星堂、金星堂、英宝社、南雲堂、大阪教育図書などから、少なくとも20点以上が刊行・流通しており、² 英語原文を大学の授業で精読する需要・機会は現在よりもあったのかもしれない。

作品の翻訳は、1960年代以来、筑摩書房などによる世界文学全集の中にコンラッドの主要小説が入っており、また代表作 *Heart of Darkness* は戦前に訳が刊行されて、「闇の奥」という不滅の日本語タイトルが継承されていた。短篇については、文庫本や、前述の注釈書に近い形で何点か刊行されていたが、『コンラッド中短篇小説集』（人文書院 1983）3巻本にまとめて収録されて一般読者に全体像が伝わるのは、10年後である。

II. 『英語研究』（1974年11月号）の特集記事を読む

上記のような条件のもと、1974年に国内の主要コンラッド研究者によるエッセイが集められ、『英語研究』誌に「特集記事」として収録された。その内容を読むことで、何が見えるか。

その特集記事の構成は、図版2の目次が示すとおりである。この掲載順

に、主な論考・エッセイについて、筆者の眼に留まった箇所を抽出する形で記す。

■巻頭エッセイ 3 点

まず先頭に、鈴木建三「コンラッド一人と作品」が総論として置かれている。この特集自体、鈴木氏を中心に構想されたもののようで、この巻頭エッセイは、「コンラッドの足跡とその周辺」「作品の流れ」「＜ポーランド的なるもの＞の意義」という 3 つの見出しで構成され、おそらく、「なぜ今コンラッドを読むか」という問いに答えようとした論に読める。「作品の流れ」において、「コンラッドの中期の作品でいちばん重要」な作品として *Heart of Darkness* と *Nostromo* を取り上げ、「このふたつの作品のなかに、いわば現代的、われらの同時代者コンラッド、人間の実存と社会的メカニズムへの鋭い洞察がもっとも集中的に示されている」(10)と論じる。この「われらの同時代者」にアプローチする論旨と読んだ。

続いて、矢島剛一「二つの世界」である。このタイトルが意味するのは、まずは「海の世界 vs 海を離れた世界」という二つの世界であり、同時に、「イギリスの伝統文化・社会 vs そこでのアウトサイダー」という二つの世界を生きた作家の有り様を指すようである。その考察の拠り所として、矢島氏はコンラッドの書簡を精選して引用していることにこのエッセイの特徴がある。1974 年時点で参照可能であった書簡集の中から、特に *Joseph Conrad's Letters to Cunningham Graham*, ed. C. T. Watts (1969) の重要性を確認しつつ、17 点の書簡を精選し、注釈を付しているおり、説得的である。

3 点目に佐伯彰一「想像力の力学—Conrad, Melville における海」が置かれている。この英米 2 人の作家を本格的に比較したというよりは、おそらく、佐伯氏による 1960 年代の優れた論考「政治小説 *Nostromo*」(『現代小説の問題点』南雲堂 1961 所収) を踏まえて寄稿されたものと推測する。

■書簡

それに続くのは、矢島剛一氏が 17 点を選び、丹念に注を付けた「書簡」のセクションである。S. Kliszewski 宛(1885)を始めに、Edward Noble 宛 (1895), E. Garnett 宛 (1896), Cunningham Graham 宛 (1899) 5 通、John Galsworthy 宛 (1901, 1908), H. G. Wells 宛 (1903), Sir Edmund Gosse (1905) など、交友

関係を示すだけでなく、作品論に踏み込んだ内容の書簡を抽出し、Jocelyn Baines の伝記や Jean-Aubry による注を使いながらも、独自の解説である。

■批評的作品紹介

主要作品について、*Narcissus* と *Lord Jim* を矢島剛一氏、*Heart of Darkness* と *Nostramo* を鈴木健三氏、*The Secret Agent* と *Under Western Eyes* を高見幸郎氏が、それぞれコンパクトに紹介している。この執筆分担は、中野好夫編『20世紀英米文学案内3 コンラッド』（研究社 1966）での執筆者と一部重なるものであり、かつ、各執筆者は作品の翻訳や注釈書の執筆も行っており、これら作品紹介は適任者が分担して執筆していると理解する。

■作品の舞台

水嶋正路氏は、この比較的長いエッセイの中で、作品の舞台となった地域を、(1) ポーランド・ロシア、(2) 西インド諸島・中南米・地中海、(3) 東南アジア海域・アフリカ、(4) 英国・スイス・フランス・イタリアの4つに分け、各地域の歴史的・社会的背景を概観しながら、作家の生涯と作品を連携させつつ辿っている。コンラッドを特徴づける世界地図の広がり、つまり長い旅路の特異性が共感をもって記述されている。

■その他のエッセイ

このカテゴリーでは、短い各論を載せており、たとえば、川成洋「『闇の奥』のアフリカ」では、1974年時点で参照可能であったアフリカ分割史の研究書を引用しながら、「色分けされた大陸」をめぐる作品として紹介している。その後の研究動向を予感させるものとして読んだ。

注目の1点として、近藤いね子「コンラッド国際会議」がある。このエッセイは1974年ケント大学での国際会議に参加した報告であり、先に引用した論集 *A Commemoration* に結実した国際会議の様子を具体的に知ることができる。つまり、日本からも参加者がいて、タイムラグなく海外の研究情報と人的交流が行われて、それが日本の学界へも報告・共有されていたことが窺える。なお、この国際会議には、当時ランカスター大学 (Norman Sherry の所属大学) に留学中の吉田徹夫氏の出席もあった。

■年表・参考文献

末尾には、詳細な「年表」と「参考文献」が付されており、これらは中野好夫編『20 世紀英米文学案内 3 コンラッド』（研究社 1966）に拠ったと記されている。つまり、1974 年時点では、この 1 冊がレフェレンスとして機能していたと想像される。

以上、『英語研究』誌の「コンラッド没後 50 年記念」特集を概観した結論として言えることは、この企画は、作家の生涯と作品、および 1974 年時点での研究動向や課題を、広い読者層に向けて（つまり、英文学研究者、学生、および一般に向けて）提示するという意図のもとに構成が練られ、求心力をもったチーム作業で編まれたものと推測する。『20 世紀英米文学案内』（1966）を、10 年後に、コンパクトにアップデートしたのがこの特集号だったと位置づけられるかもしれない。この数年後に、コンラッド研究の単著として今でも参照されることの多い吉田徹夫著『ジョウゼフ・コンラッドの世界一翼の折れた鳥』（開文社 1980）が刊行される。*The Cambridge Companion* (1996)で言うところの a watershed は、こうした出来事にも当てはまるかもしれない。いずれにせよ、1974 年に英文学専攻（コンラッド研究）を志す学生・院生が見たであろう景色は、たとえば 1996 年に見た景色とは随分と異なるものであったろう。

注

¹ 『英語研究』誌は、研究社の月刊誌として数十年間継続して出版されていたようであるが、何度かのタイトル変遷を経て、1975 年 3 月号をもって終刊となっている。国立国会図書館の NDL デジタルコレクションでも限定公開されており、全文へのアクセスは比較的容易のはずである。

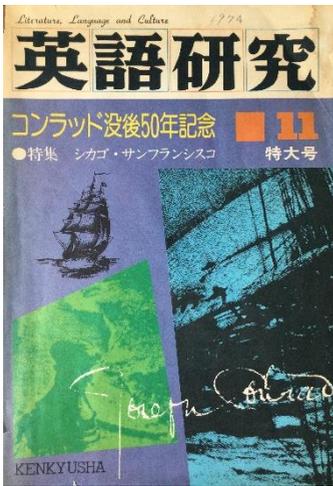
² この時期の注釈書のリストアップについて、社本雅信氏から詳細な情報提供をいただいた。加えて、吉田徹夫氏の著書の中にも、関連リストが掲載されている（参考文献 pp.12-13）。

引用文献

- Sherry, Norman, ed. *Joseph Conrad: A Commemoration —Papers from the 1974 International Conference on Conrad*. Macmillan, 1976.
- Stape, J. H., ed. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Cambridge UP, 1996.
- J. H. ステイブ編著 社本雅信監訳 日本コンラッド協会訳『コンラッド文学案内』研究社 2012.
- 「コンラッド没後 50 年記念」. 『英語研究』1974 年 11 月号, pp. 1-53, 99. 研究社.
- 中井亜佐子『日常の読書—ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』を読む』. 小鳥遊書房 2023.
- 吉田徹夫『ジョウゼフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』. 開文社. 1980. 第 2 版 2004.

(しだら やすこ 日本コンラッド協会会員)

「コンラッド没後 50 年」を振り返る



図版 1 表紙

図版 2 目次（一部）

コンラッド没後50年記念〈特大号〉目次

| | | | | |
|--|--|---|--|--|
| <p>水嶋 正路 34</p> <p>▼ コンラッド——作品の舞台</p> | <p>「西欧の眼のもとに」 高見 幸郎 33</p> <p>「密 偵」 高見 幸郎 32</p> <p>「ノストローモ」 鈴木 建三 31</p> <p>「闇の奥」 鈴木 建三 30</p> <p>「ロード・ジム」 矢島 剛一 29</p> <p>「ナーシサス号の黒人」 矢島 剛一 28</p> | <p>▼ 批評的作品紹介</p> <p>矢島 剛一 編 20</p> <p>▼ コンラッドの書簡</p> <p>想像力の力学 佐伯 彰 16</p> <p>二つの世界 矢島 剛一 12</p> <p>鈴木 建三 8</p> | <p>▼ コンラッド——人とその世界</p> <p>『ノストローモ』に 描かれた南米 間杉 貞 40</p> <p>「闇の奥」のアフリカ 川成 洋 41</p> <p>トマス・マンとコンラッド 松浦 憲作 42</p> <p>コンラッドとロシア 野口 勝子 43</p> <p>ジットとコンラッド 曾根 元吉 44</p> <p>コンラッド雑感 杉浦 廣治 45</p> <p>コンラッド国際会議 近藤いね子 46</p> | <p>▼ 親しくなった文壇人 ——その証言</p> <p>母親と女性観 矢島 剛一 39 47</p> <p>マルティン・ゲニアルな 英語 袖山 栄真 48</p> <p>船員時代のコンラッド 水嶋 正路 50</p> <p>年表・参考文献 水嶋 正路 50</p> |
|--|--|---|--|--|